

もくじ

谷派の絵師、船津文淵の墓 … P1 大久保家資料の紹介⑥紙屋と問屋たちの古写真 … P2
文化財デジタルマップ … P2 はい文化財係です③文化財の修理 … P3 お化け煙突60年④ … P4

足立史談

第665号

2023年7月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

文化遺産を伝える史跡②

谷派の絵師、船津文淵の墓

多田文夫

船津文淵（一八〇六～

のみ知られた存在でした。

1 古文書と美術資料と作品

五六）は、江戸時代の後半に活躍した谷派（谷文晁一門）の絵師です。文淵の画業についてご紹介したのは、七年前の平成二八年（二〇一六年）春の文化遺産調査特別展『美と知性の宝庫 足立』でしたが、それ

船津家は、現在の江北、沼田村に居を構えています。区内では名勝荒川堤桜（江北五色桜）に深く関わった船津静作が知られていました。そもそも文淵が遺した資料群に出

会えたのは平成二六年（二〇一四年）五月のことでした。現御当主、船津

ヒデ子さんのご厚意で、桐の軸箆筒や衣装箱等に収納されていた多くの資料を拝見できたのがきっかけです。

古文書には絵師の谷文晁から与えられた雅号の授与状（図1）、酒井抱一から谷文晁へ送られた手紙をはじめ「註文簿」や日記も見出されています。美術資料では縮図帳、粉本、印譜をはじめ谷文晁の印章類に至ります。本画も伝来しており、とくに天保八年（一八三七年）に師の谷文晁から与えられた波濤雲龍図（図3）は師弟関係を物語ります。

2 墓所をたずねる

文淵にまつわる場所として墓所があります。船津家近くに位置し代々のお墓とともに文淵夫妻が葬られ船津ヒデ子さん丁寧に維持されています。（図2）

さて船津家とのお付き合いですが一九九〇年代に入り、当時の御当主、船津金松さんから上野の東叡山寛永寺領（御神領）であった足立区西部

の歴史がわかる古文書を紹介して下さったのがきっかけでした。

ご先祖の絵師、文淵も普段は御神領の重役、大農家であり実名の船津久五郎重許（ふなつ・きゆうごろう・しげもと）として活躍していました。一六七年前に亡くなった文淵は、いま船津家近くの墓所で、しずかに眠りについています。

※文淵の「淵」は「淵」も用例があります。（学芸員・文化遺産調査担当係長）



図2 船津文淵の墓（足立区江北）左側面に「船津文淵」と絵師名が記されている。



図3 谷文晁「波濤雲龍図」正月の描き初めとして文淵に贈った作。

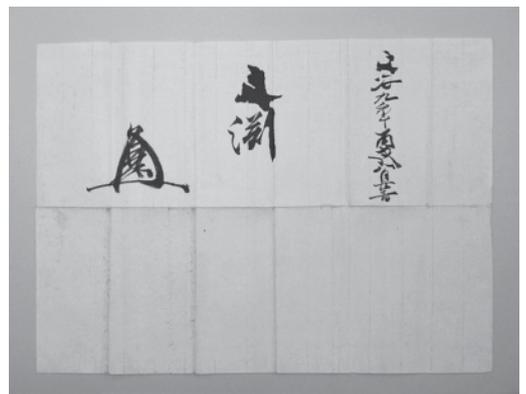
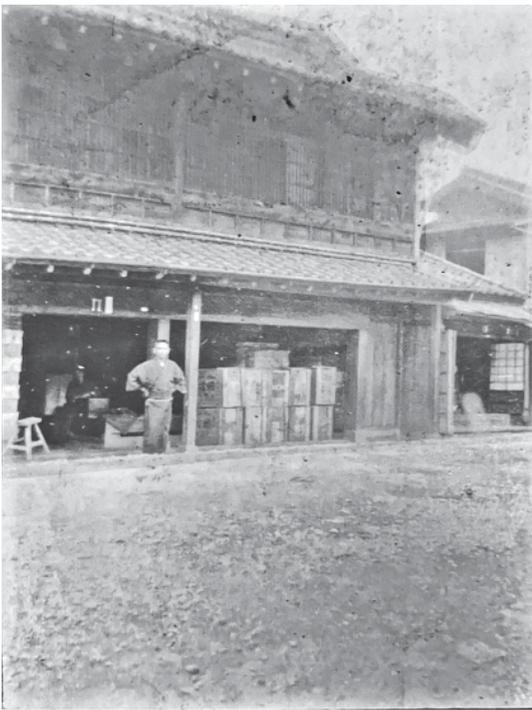


図1 谷文晁による雅号の授与状

大久保家資料の紹介⑥
紙屋と問屋たち
 の古写真
 郷土博物館

紙屋大久保伊助家には、これまでご紹介した古文書、美術品のほか古写真も伝来しています。そこから、ごく一部ですが2点をご紹介いたします。

■地漉紙問屋、紙屋の建物 左の古写真は、紙屋伊助の様子を伝えています。手前の道路は日光道中の旧道で、西側にあった二階建ての大きな商家です。千住四丁目の西側、現在の四丁目十八番にあたります。店の一階軒下に見える人見梁（ひとみばり）が、約2間（三・二m）と1間（一・八m）程もあり、大きな店先空間を



大久保家は船津文測の絵馬を、横山家は狩野寿信の屏風、内田家は酒合戦の大盃に絵巻を、若田家は千住の琳派絵師、村越向榮の屏風といったように、現在の文化遺産調査でご紹介している地域の美術品を伝えています。

このお写真の

確保しているのが見えます。人見梁の長さは当時の商家の「自慢」でした。また二階も重厚なつくりで、どっしりとした雰囲気も伝えています。

■千住の間屋衆 下に掲げた写真は千住の間屋衆が大正十一年（一九二二年）に箱根の大涌谷に、出かけた時の記念写真です。

当時の南足立郡千住町の方々のお名前が裏面に記載されています（左下参照）。

これを見るだけでも地漉紙問屋で四丁目の大久保伊助氏（名前2筆目）、同じく横山佐助氏（同3筆目）、川魚問屋で仲町の内田與兵衛氏（同4筆目）、葉問屋で同じく仲町の若田太右衛門氏（同5筆目）と続きます。最後の加藤幸三郎氏は千住町長を務めた方になります。



方々は、そうした足立の美術を支えた人々と言えましょう。お写真と人物についてご存知の方なにとぞ情報をお寄せください。

【裏面文字の翻刻】
 大正十一年四月十八日、箱根登山記念
 大涌谷ニ於テ撮影。
 金坂芳太郎殿
 大久保伊助殿
 横山佐助殿
 内田與兵衛殿
 若田太右エ門殿
 山崎雅吉殿
 河合欣三郎殿
 加藤幸三郎殿

文化財デジタルマップ

文化財や、寺社等に立っている説明板・標柱などの所在地を示した文化財デジタルマップ（Googleマップ）を公開しました。

史跡めぐりに活用できるほか、読み物としても利用できます。ぜひ、一度ご覧ください。

【利用方法】

「足立区文化財デジタルマップ」と検索するか、QRコードを読み取るなどして、ご利用ください。



文化財デジタルマップ（Googleマップ）
 （問先：文化財係 03-3880-5984）

はい文化財係です 38

文化財の修理

—真國寺

木造夢想普賢菩薩立像

附法華経卷子本—




写真1 全体像 (修理後)
(像高 85.5cm)



写真2 頭部ホゾ部分の墨書

■文化財と災害 日本は地震や水害などの災害が多い国です。そのため、歴史上、文化財が被害を受けることは数多くありました。例えば、足立区指定有形民俗文化財の「旧和井田家住宅(母屋)」「きゅうわいだけじゅうたく(おもや)、鹿浜二一四四—一足立区都市農業公園」は、安政大地震(一八五五)を乗り越えてきた古民家で、何度も修理されています。また、区内には、水害の痕跡がある文化財もあります。文化財は、こうした過酷な環境の中で、先人たちが修理をしながら長い間守り伝えてきたものなのです。そして、災害が多

発する現代の我々も、同じように文化財を守っていく必要があります。

■千葉県北西部地震 令和三年十月七日に発生した千葉県北西部地震は、マグニチュード五・九を記録し、足立区でも震度五強を記録しました。この地震により、真國寺(伊興五一—)が所蔵する足立区登録有形文化財(彫刻)の木造夢想普賢菩薩立像 附法華経卷子本(もくぞうむそうふげんぼさつりゅうぞう つけたりほけきょうかんすぼん、以下普賢菩薩像と略す 写真1)が損傷しました。今回はこの普賢菩薩像の歴史と、修理内容についてご紹介します。

■真國寺 建武二年(一三三五)の創建と伝わり、一五〇〇年代に日蓮宗に改宗したといわれ、本尊は釈迦牟尼仏です。ほかに応永三十二年(一四二五)に彫られたと伝わる日蓮上人像や、江戸時代後期の鬼子母神像などが安置されています。貞和四年(一三三八)から文亀三年(二五〇三)までの板碑も、四基、足立区登録有形文化財となっています。

■制作者 普賢菩薩像は寄木造で、頭部下部のホゾ(突起)を体部へ挿首しています。そのホゾに「寛政十二年 庚申十一月吉日 大仏師 伊藤光雲作」と墨書されています。胎内の法華経卷子本には、川玉日慧を願主とした願文もありました。

生やすなど、きわめて特異な風貌をしています。

残念ながら、伊藤光雲や川玉日慧の詳細はわかりませんが、仏師名など造像の背景を知ることができ、江戸時代の感得信仰を伝える貴重な仏像であることから、平成二十六年に文化財登録されました。

■地震の被害と修理 普賢菩薩像は、地震によって倒れ、左右の体側部が外れるという損傷がありました。そのため、真國寺が専門業者に依頼し修理がなされました。

修理内容は、表面の汚れ除去や、はぎめ(接合部)の膠(にかわ)の除去、亡失・欠失部を新しい木材で補うといったものです。どの部分が補った部分なのかを後世の人々がわかるように詳細な報告書も作成されています。また、木材の組織分析もなされ、カヤ材であるという新発見もありました。

文化財は、災害などの損傷に対して、適切な修理をしながら、後世に伝えていく必要があるのです。

【参考文献】

『区政80周年記念特別展 足立の仏像』足立区立郷土博物館、平成二十四年

※本修理の一部には、足立区から奨励金が交付されています。

(文化財係学芸員 佐藤 貴浩)

お化け煙突60年④ 先輩の思い出話

千住火力発電所は一九六三年に稼働を停止し、翌年に解体されました。発電所の終焉となった六〇年前を振り返ります。元千住火力発電所の職員格和宏典さんに文章をお寄せいただいています。

筆者が入社した昭和三十六年にはまだ生え抜きの先輩が大勢いました。新人社員研修時やその他の場で語ってくれた思い出話を紹介します。

■電気課運転係大野孝行係長の話 大金を手にして・・・

噂話だが、発電所が建設されるころ一反歩(三〇〇坪)を一〇〇〇円(註)で売った人が、かなりの現金で貰い、神棚に上げたりタンスに入れたり、フツンの下に入れたりしても安心できず、夜も眠れずおかしくなってしまったということでした。

■昭和一〇年頃の仕事の仕方

この頃の火力発電所といえは千住火力と鶴見火力の二か所で、発電は冬の渇水期のみ、渇水で発電停止の水力職場から人員応援があった。そして水力に水が戻ると火力は停止され、定期検査に入ったんだ。

そして、労働基準法も関係なく、安全面も非常にルーズだったし、社員教

育も皆無だったんだよ。先輩は後輩に自分の知識をなるべく教えようとせず、電気配線の工事をしたときなんか当人だけが自分の図面を訂正しておき、他人には絶対教えなかったんだ。そう、虎の巻として懐にしまいこんじゃうんだよ。ひいては、その虎の巻をもとに仕事をするから、「あいつは仕事のできる奴だ。優秀だ。」と上司からも同僚からも一目おかれたんだ。

このため、先輩は先輩の仕事を盗むしかなかった。そうしなければ、何年たっても仕事を身につけることが出来ず。成績の悪い社員との烙印を押されてしまったんだ。

■三分前にゃ出勤だ

新人は先輩より三〇分前に職場に行ってお湯を沸かしながら掃除をし、先輩が出勤してきたらお茶を入れ、後片付けをして職場に飛んでいくんだ。かといって、一丁前の仕事があるわけでもなし、道具の持ち運びや機器類の清掃など、先輩の指示を受け、一日現場を飛び回っていたんだ。そんな中で少しづつ仕事を盗んでいったのだ。

■なんとか一人前に

こづかれ追い回されながら三年もたち、人並の意地があれば曲がりなりに一人歩きができるんだけど、このあ

たりで、「あいつはダメだ」と思われたら、また当分うだつがあがらず、補機運転の下回りか配電盤で記録を取りながら、コケが生えるのを待つばかりだったんだよ。

なんとか使えるとなると、各課の設備保守にまわされるんだけど、こうなりやしめたもんさ。故障箇所も熟知して存在感もでてくるんさ。ボイラー屋の怖いオツサンに「でんきやあ〜」と大声でハツパをかけられても平気の平左。いっばしの親方気分、柳に風と受け流していたんだ。

■安全もへったくれもあるもんか!

作業時は、ナツパ服に吊りズボン、カンカン帽に板ゾウリ。一〇〇V・二〇〇Vを停止して作業すると馬鹿にされるから、電気が通電されたままの活線作業だったんだ。先輩から、「気をつけるよ!」と言われるけど、「感電するなよ!」と体を気遣っての言葉じゃない。「シヨート(短絡)させるなよ!」という意味だから乱暴な話だよな。

■電気課作業係渡辺千代美係長の話 東京電燈時代の組織

現在のような機構ではなく、今の所長にあたる人が主任という名前で呼ばれていたんだ。

社員は一〇人程度、雇員(準社員)・傭員(臨時)が一〇〇人くらいだったかなあ。休日は一か月に二日間、年次休暇も五日くらいだった。初代所長(主任)は石田惣太郎氏で

日本発送電株式会社になってから所長制になったんだ。

■台風で大わらわ

昭和一三年(一九三八)九月、昭和四年(一九四九)八月三十一日〜九月一日(キティ台風)は大変な水害にまわられた。配電盤関係は大したことはなかったんだが、本館地下室が浸水して押込送風機をはじめ各種電動機が全滅、モーターの乾燥に忙しい思いをしたよ。キティ台風のときは修理を一部外注したんだが、物資不足の頃でもあり、かなりの日数を要して困窮した想い出があるんだ。

新人社員研修時、「私が若かった頃、先輩は仕事を教えてくれませんでした。仕事を盗んで覚えるしか手があったんですよ。今の新人社員は、このような研修を受けることができ幸せですね。」と語っていた言葉を今でも鮮明に覚えています。

(註)発電所の稼働は大正一五年(一九二六)。当時、銀行の初任給が五〇円から七〇円であった。『値段の明治大正昭和風俗史 上』(週刊朝日編)

【訂正】

史談六六一号「お化け煙突60年①」の図キャプション「汽缶(タービン)運転に関する諸時間・回転数」は、正しくは、「汽機(タービン)運転に関する諸時間・回転数」です。お詫びして訂正します。